

## ベルンハルト・ケラーマン『トンネル』（秦豊吉訳）の復刻に寄せて

徳 永 菜 摘 野

コロナ禍の中、感染防止のため日常生活の様々な行動が制限される昨今、鉄道その他公共交通機関による不要不急の移動も控えるべきとされている。モノ・カネ・人が広範囲に自由かつ高速で移動することがよしとされていたのがコロナ前の世界だったとすれば、コロナ中・後の世界ではそうしたコロナ前の世界のあり方が全面的な見直しを迫られている。こうしたコロナ禍による世界観の転換は、万人が世界中を高速で快適に移動する未来を描いた多くのサイエンス・フィクション（SF）作品の解釈にも大きな影響を与える。その一例として本稿が取り上げるのが、ドイツの作家ベルンハルト・ケラーマン（Bernhard Kellermann, 1879-1951）の小説『トンネル Der Tunnel』（1913年）である。アメリカ人発明家・技師による、北米東岸と欧州を結ぶ大西洋横断海底トンネル鉄道の建設という壮大なスケールのこの物語は、発表後たちまち世界的ベストセラーとなった。本作は、邦訳で読むことができる数少ない第一次世界大戦前のドイツ語圏のSF作品の一つでもある。秦豊吉（1892-1956）による邦訳が新潮社から出版されたのは昭和五年（1930年）、テア・フォン・ハルボウ（Thea von Harbou, 1888-1954）の小説『メトロポリス Metropolis』（1927年、同年中にハルボウが脚本を担当し、夫のフリッツ・ラングが監督した映画が公開された）の邦訳（1928年）に続く秦の世界的話題作の本邦初訳となった。それから90年の歳月が流れ、一昨年、秦訳『トンネル』の復刻版（国書刊行会、2020年）が刊行された。本復刻版では旧字・旧仮名が新字・新仮名に改められているなど、読みやすさに配慮した若干の変更のほかは、当時としては不道徳的、性的過ぎたのであろう箇所は伏字まで、もとの秦の、電文体的原文をさらに複数の短文に分割しテンポよく重ねることで生まれる躍動的な文章が忠実に再現されている。脱落していた箇所はドイツ文学研究者の識名章喜が原作初版にあたって日本語訳し、巻末にまとめて記している。この復元作業により『トンネル』の完全な日本語訳を読めることも本復刻版の強みだ。巻末に再掲されている、本作に影響を受けた手塚治虫（1928-1989）と筒井康隆（1934）の書評も日本のSFファンを惹きつける。しかしドイツ文学研究者の注目の的は、同じく巻末に掲載された識名の解説だろう。知られざる戦前のドイツ語圏大衆文学界の状況や著者と訳者の詳細な紹介、そして本作の物語論的分析にいたるまで丁寧に論じている。ドイツ語で書かれたエンターテインメントを求めている人にも、ドイツ文学史上の空白地帯に踏み出そうとしている人にも薦めたい一冊である。

未来の地球規模の土木工事や巨大人工物を扱ったドイツ語圏のSF・幻想文学作品はケラーマンの本小説前後に多数存在し、ドイツ語圏の文学ではこうしたテーマが伝統的に好

まれていたのかと思うほどである。たとえば、解説で識名も挙げている初期ドイツ語圏SFの代表的な作家クルト・ラスヴィッツ（Kurd Laßwitz, 1848-1910）は連作短編『宇宙の法則に逆らって—3877年の物語 Gegen das Weltgesetz: Erzählung aus dem Jahre 3877』（1877年）でドイツ～カリフォルニア間地下トンネル鉄道建設を取り上げた。また長編『二つの惑星で Auf zwei Planeten』（1897年）では、地球表面の火星基地と、地球上空の宇宙ステーションを結ぶ「無重力場 abarisches Feld」（現代風にいえば宇宙エレベーター）の建造が、建設プロジェクトに携わった火星人たちの苦労話や、機械故障による宇宙ステーション崩壊の危機、両惑星間の音信不通といったエピソードとともに、作中で大きな比重を占める。

1960年代の東独ではヘルベルト・フリードリヒ（Herbert Friedrich, 1926-）がベーリング海峡を横断するトンネルとダム建設を『水に立ち向かうダム Der Damm gegen das Eis』（1964年）で書いた。地球温暖化に伴う極地方の氷の消滅や海面の上昇などに直面している現代では、この小説における氷との戦いは環境破壊以外の何ものでもないが、本作では環境破壊に対する顧慮は全くなく、親子の絆や人種、国籍、東西対立を超えた現場の人間たちの友情と愛が前面に押し出されている。同じ頃出版されたオーストリアの作家マルレン・ハウスホーファー（Marlen Haushofer, 1920-1970）の小説『壁 Die Wand』（1963年、同タイトルで2012年に映画化もされた）は、日本のSF作家小松左京（1931-2011）の短編小説『物体O』（1964年）に似て、ある日突然壁が出現し、壁を挟んだ往来・通信が不可能になる物語である。小松の作品では突如落ちてきた謎の巨大リング状物体Oによる破壊を生き延びたものの、この巨大な円の内側に閉じ込められてしまった日本の住民の一部が円の外側の世界から隔離される。ハウスホーファーの作品では主人公のみが隔離された生活を強いられ、絶対的な孤独の中で徐々に自我を失い自然と融合していく。小松とハウスホーファーは孤立した空間、制限された生活物資や資源の中で持続可能な生活や社会を営むことがいかに困難かを描いており、今日の地球規模の資源の枯渇や食糧・ゴミ問題、エネルギー政策などと関連づけて解釈することが可能である。

ラスヴィッツの構想した、十九世紀末としては非常に先進的な宇宙開発計画は現在まさに実現しようとしているが、こうした最先端の宇宙開発技術の知見から人類の月面開発をテーマとする長編SF『リミット Limit』（2009年）を書いたのが、ドイツのSF・ミステリー作家フランク・シェッツィング（Frank Schätzing, 1957-）である。識名は『トンネル』の特徴として、「トンネル・プロジェクトを、投資、起業、運営、雇用、宣伝、メディア対応 [中略]、都市計画 [中略] といった一連の経済活動のいかにも人間臭い面も含め具体的・立体的に描く」（505頁）ことを挙げる。こうした『トンネル』の地に足がついた現実的、社会的な特徴を引き継ぐのが『リミット』であると言うこともできるだろう。ただし、ケラーマンでは大落盤事故や大規模ストライキといった悲惨と苦難の末にトンネルが開通し、主人公の運転する列車がトンネルを抜けて陽光の中、目的地に到着する結末に明るい未来が重ね合わされているように読めるのに対し、シェッツィングの月面開発は様々な陰謀が絡み、月面に完成した施設が次々破壊され、人間たちは極限状態に追い込ま

れる。人間の破滅への危機感は気候変動を扱ったシェッツィングのベストセラー長編SF小説『深海のYrr Der Schwarm』(2004年)でも顕著である。『リミット』も『深海のYrr』も最終的には破局を免れるが、黙示録的な世界観は『トンネル』の中盤で見られるそれよりもさらに強められており、科学技術により人間は自らを含む全てを破壊してしまうのではないかという現代の暗い展望を反映している。

『トンネル』に話を戻すと、速く大規模なモノの移動や金回り、人流を表現している個所で秦が多用する訳語が「どしどし」(傍点強調ママ、傍点のない箇所もある)である。ただしこの訳語に対応する特定のドイツ語が原文にあるわけではない。この訳語を含む箇所の一部を原文と併せて挙げておく。「今までは、物事をどしどしやっつけてしまいたい性分が抑えられ抑えられていたのであるが、今はもうその性分を思うさま発揮してもいいことになった。Die Bahn war frei, alle Geschwindigkeitsenergien, die er in sich aufgespeichert hatte, konnte er entfesseln.<sup>1)</sup>」(141頁、傍点強調ママ)、「すると列車がどしどし入って来て、どしどし通過して行く。Die Züge werden hereingeleitet und fliegen dahin, [...]」<sup>2)</sup>(175頁、傍点強調ママ)、「それから、深くなった海の中へ、昔の沖合へ、どしどし岩石を沈める。毎日何千車という岩石をぶち込む。Dort draußen aber, wo das Meer schon tiefer war, versanken täglich Tausende von Waggonladungen Gestein im Meer [...]」<sup>3)</sup>(177頁)、「<sup>パリ</sup>、<sup>ロンドン</sup>、<sup>リヴァプール</sup>、<sup>ベルリン</sup>、<sup>フランクフルト</sup>、<sup>ウィーン</sup>などから、金がどしどし流れ出して、S・ウルフの大きな衣<sup>か</sup>裏に吞まれて行った。Aus Paris, London, Liverpool, Berlin, Frankfurt, Wien floß das Geld und strömte in S. Woolfs große Tasche, [...]」<sup>4)</sup>(195頁)。引用箇所にもるように、この訳語は物事が引き続いて起こったり行われたりするさまや登場人物が物事を遠慮なく行うさまだけでなく、物質的経済的豊かさやスピード、エネルギー、能率性をも表しており、コロナ前であれば現代人の物質的充足、速度、有用性を重視する価値観、「速くて便利な」生活スタイルに合致していたであろう。しかしパンデミックを経た現在では、この「どしどし」を批判的に読まなければならなくなった。感染症の脅威といういま出口の見えない長く暗いトンネルの中で、『トンネル』の主人公のように不屈の精神で初めに立てた目標の達成に邁進する姿勢は無論、今なお重要である。しかし人間が長期的展望に立ち思慮深く振舞うのではなく、目先の欲求に捉われ経済・社会活動を営むために、日々大量の資源が消費され、それが森林伐採や野生動物の乱獲といった環境破壊や新型ウイルスと人間との遭遇、ウイルスがグローバル化社会で短期間に蔓延するといった諸問題につながっている。そうした諸問題を私たちはまさに今、立ち止まって真剣に反省・議論しなければならないのではないだろうか。

1) Kellermann, Bernhard: Der Tunnel, Roman. (Bibliothek Suhrkamp, Bd. 674) Frankfurt a.M. 1980, S. 108.

2) Ebd., S. 136.

3) Ebd., S. 137.

4) Ebd., S. 152.